



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子育てグループ活動における父親の学習過程と意識変容：K中学オヤジの会を事例に
Author(s)	吉岡, 亜希子
Citation	社会教育研究, 31, 129-141
Issue Date	2013-04-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55113
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00231372_31_10.pdf



子育てグループ活動における父親の学習過程と意識変容

— K中学オヤジの会を事例に —

吉 岡 亜希子*

目 次

1. はじめに	129
2. 対象と方法	133
3. K中学オヤジの会の歩み	133
4. K中学校オヤジの会の実践内容と学び	134
5. 学びと意識変容	138
6. まとめ	140

1. はじめに

本論は、思春期の子育てと父親の社会教育に関する実践分析である。子どもが育つ上で最も不安定な時期であり、それゆえに父親の出番とも言われてきた思春期。不登校やいじめ、非行など葛藤を抱える場合も少なくない。しかし、乳幼児期から思春期に至るまで、子育てのほとんどを母親が中心となっていて行っているのが日本の現状である。父親たちは出番といわれつつも関わりは乏しく、家族内で葛藤を生むケースもある。何よりも親として学ぶ場や機会が少なく、親の学び、子育て支援という面では、父親は弱者ともいえよう。こういった状況の中、中学校において子育てグループを組織し、活動を行っている父親たちが存在する。彼らは、なぜグループ活動を組織し、そこではどのような学びが展開しているのであろうか。グループ活動は、思春期の子を持つ父親の学びの場としてどのように機能しているのだろうか。

筆者はさっぽろ子育てネットワークという市民団体で親育ちのための学習会を仲間と共に企画し実践している。その中で、思春期の子育てにおける親の学習課題について学ぶ機会を得てきた。学習会ではわが子の不登校や非行の体験が語られ、これから思春期の子育てを迎える親にとっては、自らの子育てを見つめ直す貴重な時間となっている。これらの学習会を通して、筆者は思春期の子

*父親ネットワーク北海道/北海学園大学非常勤講師

どもを持つ父親には次のような学びが必要であると考えに至った。

一つ目は、父親の子育てからの疎外である。思春期は子どもにとって非常にデリケートな時期となる。親にとっても乳幼児期、学童期とは異なる対応が求められる。思春期は父親の出番ともいわれるが、実際は仕事に追われ、日頃関わりの少ない父親が思春期特有の課題を抱える子どもと一足飛びに信頼関係を築くことは難しい。思春期の子をもつ父親にとって、子育てから疎外されたまま放置され、さらに親として学ぶ機会もない中、子どもが思春期を迎え、意思の疎通が難しくなったり、不登校、非行など大きな葛藤を抱えたとき、父親は立ちすくむ。そして、その時になってようやく自らの仕事と子育て（生活）の在り方を問い返すこととなる。父親という存在が知らぬ間に企業社会の論理にからめ捕られた暮らしに陥っているということに気づくための学びが必要である。

二つ目は、親の自己責任論の問題である。現状では、子育ての主な担い手として母親が位置づいている。もともと子育ての長い歴史の中で、母親一人が子育てを担う状況は、雇用労働者が増加し、職住分離、都市への人口流入という変化と共に生まれた新しい形態である。この形態は、子どもの育ちにとってマイナス面も多く、その反省から子どもは父親を含め、複数の大人との関わり合いをもちながら育つことの意義が強調されている。だが、相変わらず、母親一人の孤独な子育ての問題は続いている。同時に、父親が過度な競争社会の中で稼ぎ手として奮闘するように母親もまた子育ての担い手として過度な競争社会を生き抜くために子どもを追い立てる役割を担わざるを得なくなっている。子どもの育ちは、親の責任という「親の自己責任論」が必要以上に強調され、子育て・教育の失敗は、母親の責任という子育て観が多く母親を苦しめ、何よりも子ども達を苦しめることになっている。

その最も顕著なものが過度の学力偏重の子育て観の広がりであろう。これらは子どもたちの生きづらさとなり、場合によっては不登校や家庭内暴力、非行などといった形で表れてきている。この問題が指摘される中、父親の子育て参加を促進する声の高まりを受け、一部ではあるものの父親たちは、この学力偏重に加担する形で子育てに参加している。それが、「教育家族」である。一般的に教育家族は、学歴・教育歴の差異にしか関心が持てなくなった家族、子どもの教育に積極的に取り組む家族をいう。母親だけでなく、父親もこの教育家族の一員という形で関わることは子どもにとって抑圧となっており、天野睦子らによる「子育てする父親の主体化—父親向け育児・教育雑誌に見る育児戦略と言説—」『家族社会学研究 23-1』、日本家族社会学会、2011においても、その構造が明らかにされている。つまり母親の責任から母親と父親の責任という形にシフトしたに過ぎず、相変わらず家族内での責任という課題を乗り越えることにはなっていない。どちらの場合も根本的な問題解決へは展開しておらず、父親に対する社会教育が機能していないともいえよう。

筆者はこれらの問題を考える際、父親を学習主体として、母親とは分けて位置付ける必要があると考える。以下はその理由である。

社会教育では、これまで親の学びを考える際、母親を親の代表として位置付けてきた。母親たち

は育児サークルや子育てサロン、子育てネットワーク等をつくり、主体的な子育て協同によって孤独な子育てやさまざまな子育て課題を乗り越えようと学び合いを積み上げてきた。これらの多くは、母親が専業主婦で父親が主な稼ぎ手という役割分業の家庭を想定し、その枠組みの中では一定の成果をもたらした。しかし、父親の子育てからの疎外の問題は放置され、一部の父親が教育家族の一員として子どもを抑圧する形で子育て参加が進んでいる。母親を親の代表として位置づけた親の社会教育では、母親が子育ての担い手という既存のジェンダーバイアスがかかったまま出発してしまうという問題は避けられない。

父親の子育てが推奨され、社会教育実践の場面でも父親講座が企画されている。しかし、実践の現場で多く指摘されることだが、母親と同じような講座形式では、父親はほとんど集まらないという事実がある。父親の問題と母親の問題は、親の問題としてイコールで考えることが父親にとっても母親にとっても有効なのであろうか。実際は、ミスマッチに対する整理を怠り、男女共同参画社会において母親と父親を分けてはいけないという、暗黙の了解、前提という次元で思考がストップしているのではないだろうか。

男女共同参画社会という前提のもと母親と父親を分けて考えず、親としてひとくくりに位置付けてしまったが故に見えなくなったり、見えにくくなってしまいう本質的な子育ての問題があると考え。故に、あえて母親と父親を分けて、親育ち・学び合いや子育て支援を考えることで明らかになる本質的な問題や解決の糸口が見えてくることを以下に示していく。

母親を親の代表と位置付け理解されてきた親の学び合いでは、とらえきれない側面とはどのようなものであろうか。従来、親といわれてきたものが母親に代表させるような概念であり、それをベースにした親の学び、親支援であったこと自体が問題である。このことが前提である限り、父親の親としての問題は放置され続ける。もちろん、母親を親代表として位置付けたとしても、父親も含めた共通の課題や学びの在り方を明らかにできる側面もある。しかし、母親と父親は置かれている社会的状況が異なり、同じ親としてまったく同じ土俵で学びの内容を考えることは、虚構のものを前提に論じられているともいえる。

例えば、母親の学び合いを考える時、前提となっている社会的状況を見てみると、子どもが乳幼児期、特に0歳では9割が家庭で子育てを行っており、1～2歳児でも保育所を利用している子どもは2.5～3割にとどまっている（厚生労働省資料「就学前児童が育つ場所（平成21年度）」）。親の学び合いや子育て支援は、主に家庭において乳幼児期の子育てを担っている母親を対象にしている。必然的に家庭で子育てをしている母親が孤独な子育てに陥らないようなアプローチがメインとなろう。父親に対しても乳幼児期の子育てにあたっている母親のサポートとして寄り添うことや子どものケア技術を学ぶ講座という発想になるのも当然だ。父親にとって最も深刻な課題である子育てと仕事の両立問題に対する法整備なり働き方に対する規制問題などには結びつきにくい。しかし、現

実は、0～2歳の待機児童問題が深刻となっており、1980年代は父親が働き、母親が専業主婦という世帯の比率が共働き世帯の比率より多かったが、1990年代から2000年代にかけそれは逆転していき、現状は共働き世帯の比率が高くなっている。このように現実には共働き世帯が増加し、仕事と子育ての両立問題は父親にとっても母親にとっても切実な問題となっているものの、家庭で子育てをしている母親を親の代表としてその学びを考える限り働き方に切り込んだ子育てしやすい環境づくりに展開しにくいといえるのではないか。

また、母親は学び合う機会を得、孤独な子育てや教育家族の問題点を気づく機会が用意されているが、母親の意識変容は必ずしも夫に理解され、共感されるものとはなっていない。母親と父親の意識が乖離したまま放置されている家族がかろうじてバランスを保っているともいえよう。それ故に、親としての学びの機会が乏しい父親は、子育て参加の推奨＝教育家族の誕生へと展開してしまう危険性をはらむ。

そのため、父親に対しても父親固有の課題や親としての子育て観を育む学びの場を作る必要がある。さて、そこで父親の子育てに関わる社会教育実践を考えていくことになるわけだが、筆者はまず母親たちの学び合いが進んでいる乳幼児期に注目し、この時期の父親グループにおける学びをみてきた。乳幼児期の子どもがいる父親は、子育て講座への参加を呼び掛けても反応が鈍く、母親と同じやり方では、展開していかない。そこで、講座形式ではないものの一定の参加者が集まっている保育所と幼稚園で実践されているおやじの会を対象にその学習過程と意識変容の分析を試みた。

その結果、父親の子育てグループは、親睦型と協同型に分類することができた。どちらも園の子どもと交流する活動を設けることで子ども理解が進み、園の行事をサポートすることで先生との連携が進んでいた。また、活動の積み重ねによって、協同の子育ての意義を理解するに至っていた。家庭内においては妻との共通の話題で会話が弾むようになったり、子どもからの評価が高まる他、特に協同型の父親グループは、活動を通し地域全体の保育問題への理解も深まり、協同で行政に改善を求める活動へも展開していることがわかった。また、学び合う父親の組織づくりには、母親中心ですでに展開しているPTA組織等には参入しにくいという意識に配慮することが重要であった。できる範囲で関わるのが可能な父親同士の組織であることも仕事による拘束が多い父親の学びの場づくりには有効であった。〔「父親の子育てグループ活動における学習過程と意識変容」『社会教育研究 No.24』、北海道大学大学院教育学研究科社会教育研究室、2006〕

それでは次に、なぜ中学校における父親の子育てグループの実践分析を行う必要があるのかを考えてみる。思春期における父親の子育てグループ活動には、乳幼児期とは異なる特有の意義があるのだろうか。乳幼児期のみならず、思春期においても父親の子育てグループには独自の役割があると示すことができ、はじめてこれらを学びの組織として保障していくことが社会全体に了解されていくだろう。思春期における父親の子育て問題を考える切り口として示した①父親の子育てから

の疎外②教育家族と父親に関わる問題について、父親の子育てグループ活動は、一定の役割を果たすことになっているのだろうか。

2. 対象と方法

調査は北海道苫小牧市で行った。小学校、中学校共に父親グループの組織率が高く、特に中学校では、3校に1校の割合で結成されていた（平成18年調査開始時）。北海道では稀な高組織率に注目し調査地とした。苫小牧市における父親グループの組織状況は、小学校22校中6校、中学校15校中5校であった。札幌市の場合、小学校211校、中学校108校、計319校のうち、父親グループが組織されているところは56ヶ所（札幌市PTA協議会調べ、平成15年調査時による。小・中それぞれの組織数は不明）で、およそ17.5%であった。一方、苫小牧市は小・中学校あわせて37校あり、そのうち父親グループは11校、29.7%と高い組織率を示していた。

本稿は、苫小牧市では最も早くに発足し、北海道内においても最も歴史のある組織といえるK中学校「オヤジの会」を対象として取り上げる。聞き取り調査は、オヤジの会の会員5名とその配偶者2名、OB2名、校長、苫小牧市社会教育行政職員、福祉関連職員に行った。本稿は平成18年～19年にかけて行った最初の聞き取り調査をベースにおきつつ平成25年現在も関わりを継続しており、この間に行った聞き取り調査や資料等のデータも一部用いた。苫小牧市は人口およそ174,000人（平成24年）、明治末期の製紙工場の立地を契機に工業都市として港と大型工業地帯を有する地域として発展してきた。港湾・工業都市のため炭鉱離職者や製紙メーカー、自動車関連産業の転勤族など他地域からの流入者が多い。また、公営住宅が多く、福祉も手厚いため、近隣の一人親家庭の転入も少なくない。

3. K中学オヤジの会の歩み

設立は平成2年。その前年に市内の中学生がシンナーを吸引し、死亡事故が起こる。また、平成2年4月にK中学の生徒3名が湖で溺死するという痛ましい事故が起こった。当時の教育現場は、苫小牧市に限らず校内暴力、非行、いじめ、登校拒否などいわゆる荒れた状況にあった。K中学に関しては、宅地開発による近隣地域の人口増の影響で生徒数が増加し、昭和60年前後は1000人規模となっていた。現在の生徒数のおよそ二倍という状況であった。そういった中、仕事の多忙等を理由に、PTA活動にほとんど関わりを持ってこなかった父親の中から、「子どもたちの教育を学校や母親に任せっきりではいけない。子どもの教育にもっと関心を持ち、父親にも何かできることがあるのではないか」といった声があがってきた。（当時の）PTA会長も「非行やシンナーの問題がある。最近（K中学ではないが）、補導員が中学生に殺されるような事故も発生した。高校の

間口削減問題でも、親が先生たちの組織に追従するだけというのはよくない」(『オヤジの会 10 周年記念誌』K 中学校 PTA オヤジの会、2000 年より)と、危機意識を募らせていた。その後、PTA 会長、役員らが、参観日や各種行事によく参加している父親 20 名ほどに呼びかけ、有志 15 名を集め準備会を設立し、平成 2 年 10 月、会員 75 名でスタートを切った。オヤジの会は、PTA の特別委員会という位置づけとなっている。10 周年記念誌に当時の会長は会の意義をこう記している。「学級崩壊をはじめとして、子どもによる自殺や凶悪犯罪の増加等、単なる社会現象を越えた大きな怪物が現代の子どもたちの心の中に大きくのしかかっているように感じられてなりません。その中で単に政治や、社会や、学校を批判して果たして解決されるのでしょうか。そのためにも、母親は家庭、父親は仕事という概念を取り払い、父親も積極的に PTA 活動に参加し、母親とともに、生徒、学校、そして地域社会の皆様と関わりながら将来を担う子育てに参加していかなければならないと思います」。また、「無理せず、出来るときに、出来ることを」というモットーが 20 年以上にわたり継続できた鍵だという。

主な活動は、グラウンドや花壇の整備、体育大会の校内巡回、中学校駅伝大会路上警備、生徒とのスポーツ交流(ソフトボール、ミニバレーなど)、学校祭バザーの手伝い(2 日間で焼き鳥 3000 本以上を焼く)、生徒との本音トーク(生徒会役員らと父親が本音で語り合う時間。設立 2 年目以降開催している)等となっている。

平成 17 年度の会長は、校長、教頭、PTA 会長、歴代オヤジの会会長 3 名と共に「6 人会」をつくり、頻繁(平均 2 週間に一回)に会合をもったという。6 人会によって、「学校がよくみえるようになった」と参加した父親は感想を述べている。K 中学は北海道内中学校の父親グループでは草分け的存在であり、近隣のおやじの会に呼びかけ、交流会を開催した年もある。こうした「オヤジの会」の活動が評価され平成 5 年度優良 PTA 文部大臣表彰を受賞している。ただ、ここ数年は、生徒数の減少に伴い会員数も減っている。また、労働条件の厳しさが増し、父親たちの参加が難しい状況になっている。

4. K 中学校オヤジの会の実践内容と学び

次に各実践の内容を概観し、実践における学びについて父親の語りからその意義を確認していくこととする。

a) 環境整備事業

まず、年度はじめに環境整備事業として、グラウンドの側溝整備や花壇の整備を行っている。普段とは違う業種の父親たちがスコップを持ち一つのことに打ち込むことで、特別な連帯感が生まれるという。

ｂ) 巡回・警備

体育大会の校内巡回、中学校駅伝大会路上警備では、卒業生が頻繁に顔をだす。中学時代おとなしかった生徒より、少々問題のあった生徒が卒業後、母校を訪ねることが多いという。父親たちも彼らとは顔見知りのため、会うと声をかけ、卒業生も笑顔で答えてくれるという。それまでわが子以外は、まったく顔を知らなかった子どもの顔を覚え、また、覚えられることは、次のような効果を生むという。例えば、学校行事に来る卒業生（高校生）の中には、タバコをもってくる者もあり、その指導は教員とオヤジの会のメンバーがあたることが多いという。こういった場合でも、知らない者同士が「タバコはだめ」というのと顔見知り「タバコはだめ」というのでは、卒業生の対応がまったく異なると父親たちは語る。

ｃ) スポーツ交流

父親と生徒のスポーツ交流も活動の大きな柱になっており、ソフトボールやミニバレーなどで汗を流している。「スポーツは、父親も子どもたちも自分の気持ちをだすところがいいですね。どちらも勝つてやろうという真剣勝負ができ、互いの気持ちが素直に出せる場になっています」（第 16 代会長）スポーツ交流の後は、子どもたちにスイカやジュースで水分を補給してもらい帰宅させ、その後、グラウンドで父親たちはジギスカンとビールで親睦を深めている。この年代の子どもたちと父親は、家での交流、休日の交流は、乳幼児期に比べ格段に減っているという。こういった状況の中、子どもとの接点を持つことでわが子やわが子の周りの子どもたちの素顔を垣間見ることになるという。体力が付き父親と互角に対戦することができるわが子やその友人らとのスポーツ交流は、父親にとって貴重なコミュニケーションの場となっている。

ｄ) 学校祭への参加

秋の学校祭では、父親たちが焼き鳥やフランクフルトを焼いて提供している。資料によると平成 16 年は焼き鳥 3000 本以上、フランクフルト 700 本以上提供している。特徴は、現役のオヤジの会のメンバーだけでなく OB の参加が多いことだ。わが子が卒業しても熱心にオヤジの会の行事に参加する父親の姿が毎年見られるという。

ｅ) OB との連携

設立 5 年目に OB 会が発足。初期の頃のメンバーも OB 会に名を連ねる。K 中学オヤジの会の大きな特色のひとつが OB 会のメンバーの積極性といえる。行事の助っ人としてはもちろん、懇親の場にも顔を出し、オヤジの会について熱く語る父親が少なくないという。K 中学「オヤジの会」にとって、この OB 会の果たす役割は大きい。OB 会は平成 7 年に行われた 5 周年式典で正式に設立された。平成 12 年に OB 会会長をつとめた K さんは、OB 会設立 5 周年にあたり、次のような文章を記している。「継続は力なり、現代は子どもを取り巻く社会や環境が大変厳しい中、初心を忘れることなく、ただ、ひたすら子ども達の為だけを思い、心を一つにして、これからも頑張ろうではありませんか。そして、この心を親から子へ、そして子から孫へと引き継いでいきましょう。『学校

を卒業したから、もう関係ない』ということではなく、『OB として、いつまでもお付き合いしたい』……そんな気持ちで一杯です」

子どもたちの痛ましい事故や事件がきっかけとなり、父親たちの自己批判からオヤジの会が発している。そして、その思いを次の世代の父親たちに伝えているのが、この OB 会の父親たちである。OB と現役会員が交流する場では、「熱い思いに奮い立たされるものがある」（現会員）という声も聞かれる。

f) 対話集会

年に一度行われている対話集会（名称「生徒との本音トーク」）は、設立 2 年目からの恒例行事になっている。主に生徒会役員と父親たちでテーマを決めて対話している。テーマは、その年によりさまざまで、「理想の親子関係」、「いじめ問題」、「ボランティアについて考える」、「親の思い、子の思い」、「時代を超えて語り合おう」、「校則」、「今の大人、社会に言いたいこと」など、多彩な内容で語り合っている。「校則」がテーマの年には、父親から「（当時流行っていた）ルーズソックスを本当にかっこいいと思っているのか？」といった質問がでたり、ある年は生徒から「父親の仕事が朝早く夜遅いので会話がな」といった声があがり、父親側からは「頭の痛い話」だと、苦笑いで答える場面もあったという。生徒側からもっと交流の機会を増やして欲しいという要望が出た年もあったが、なかなか議論がかみ合わず苦勞することも少なくないという。父親側も生徒側も身構えてしまい、会話が弾むところまではいけないのが課題だ。

とはいえ、わが子以外の子どもとの交流により、現代の中学生の日常生活を知る機会になったり、一方で、父親の子ども時代と同じような過ごし方をしていることを知り、「僕らの頃と変わらないんだー」とうなずく父親もおり、双方の理解が深まる、新鮮な時間となっている。

g) 飲食を伴う交流

忘年会や新年会は、父親たちの親睦の場となっている。平成 17 年には、オヤジの会の会長、PTA 会長、校長、教頭などが「6 人会」という会をつくり、積極的に交流を図ったという。6 人会ではさまざまな業種の大人たちが、子どものことや学校のこと地域のことを語り、親睦を深め、視野を広げる機会になったという。こういった活動は、父親たちがこれまで母親任せだった PTA 活動、学校そのものに関わりをもつきっかけとなり、また、校長、教頭、教員らとの関わりをもつことで、「それまで見えなかった学校、子どもたちが良く見えるようになった」（第 15 代会長）という。

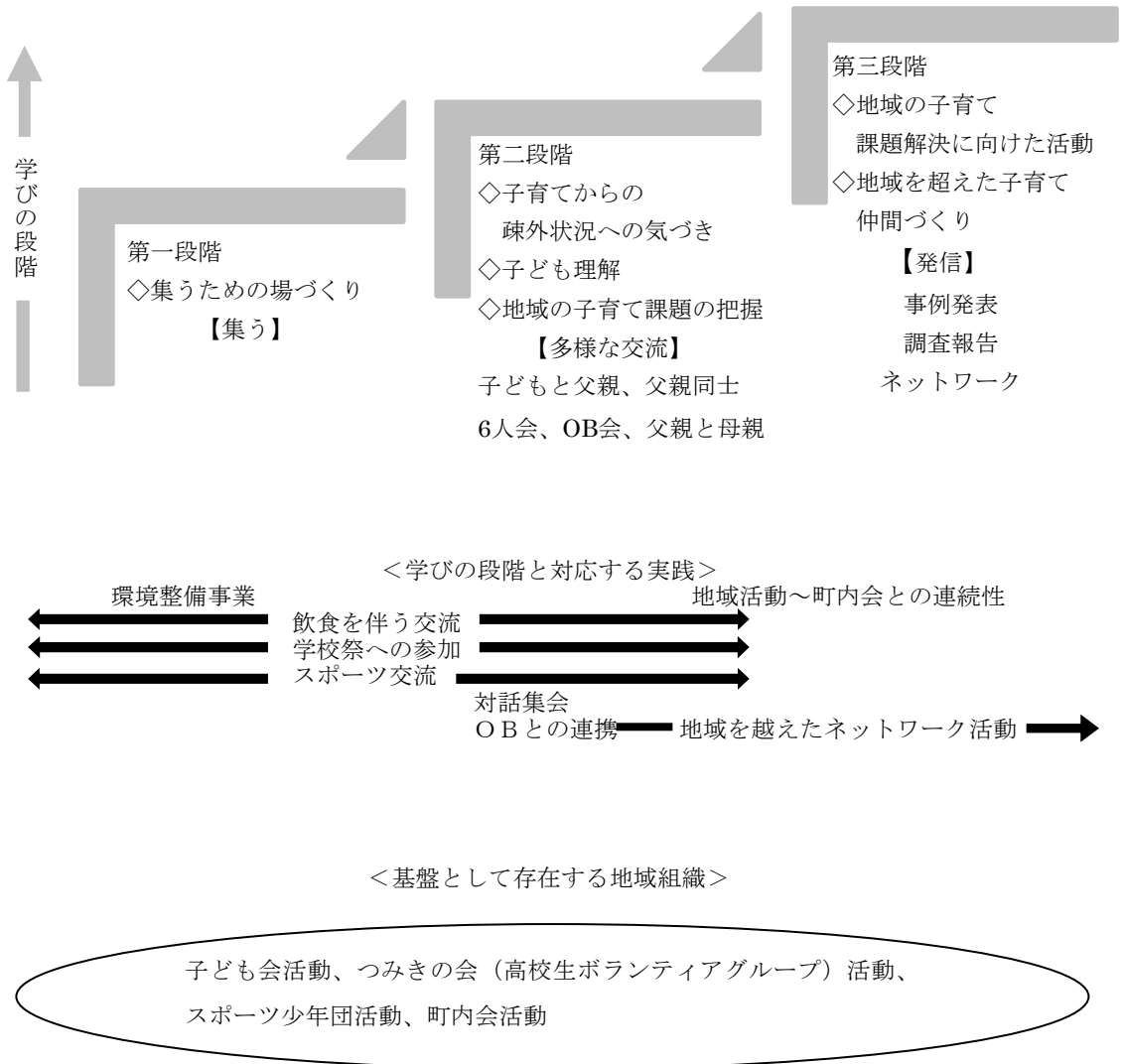
h) 地域への広がり

オヤジの会の経験を通し地域活動に目覚める人も多い。オヤジの会はもともと、子ども達の荒れに危機感を募らせた父親が立ち上げた組織ではあるが、打ち合わせや行事を通し、学校へ何度も足を運ぶうちに、誰しもわが子だけではない中学生の課題、教員の姿がみえてくるという。そして、地域にどのような子どもがいて、どのような暮らしがあり、どのような課題があるのかが鮮明に浮かび上がってくる。その結果、オヤジの会を卒業後、町内会活動で力を発揮する父親が次々と現れ

ている。オヤジの会出身で、町内会でも活躍する父親が、オヤジの会で知り合った父親を町内会活動に巻き込んでいくという流れが出来上がっているというのである。

平成 23 年、札幌で市民団体「父親ネットワーク北海道」の設立集会が行われた。この新組織においても、中心的なメンバーとして K 中オヤジの会 OB 会会員が関わっている。父親の子育てグループの情報交換を目的に立ち上がった組織である。交流の申し出があれば、手弁当でどこへでも駆けつけ熱く語り合う父親たちは、地域を越えた子育ての仲間づくりの担い手として注目されている。

実践展開図



＜考察＞

実践展開として3つの学びの段階を確認することができた。第一段階の父親たちは、父親同士、まずは集うための場づくりから始める。この段階では、父親の子育ての持つ意義を深く追求することはないが、グループ活動の心地よさを体で実感することになる。次に第二段階として子ども理解、地域の子育て課題の把握を目指し、子どもと父親の交流、父親同士の交流、先生と父親の交流、その時々に必要な交流組織を作り、理解を進めるために主体的に交流し、積極的に学び合うことが確認できた、その中で自らの子育てからの疎外、教育観、人生観の問い返しが見られた。第三段階として地域課題の解決に向けた行動や団体を越えた仲間づくりを目指し、発信、ネットワークへの展開が見られた。父親の子育てグループ活動によって、自らの生き方が変容し、思春期を生きるわが子やわが子の周りを取り巻く子どもたちの姿が見えてくるようになった父親たちは、その経験を発信し、仲間づくりに力を発揮するようになる。そして、それらを支えるものとして、地域の町内会や子ども会、高校生のボランティア組織、少年団との連携が見られた。

5. 学びと意識変容

それでは、次に父親の子育てからの疎外や教育家族と父親の関わりの問題に対し、グループ活動が果たす役割について個別の語りから確認していくこととする。(紙幅の都合により、共に元会長であるTさんとTKさんの語りを代表的な事例として取り上げる)

◇ K中学オヤジの会元会長 Tさんの聞き取り調査より

① 父親の子育てからの疎外

「上の子が中学に上がり、オヤジの会と出会いお父さんたちとの交流を深めました。この会は、子どもたちのより良い環境づくりという目的がありますが、一方では父親の社会勉強の場だと思います。職種も人生観も教育観もみんな違います。いろいろな話題になり、激論になることもあります。その中で、自分の視野の狭さを痛感するするとともに私自身の教育観も変わっていったと思います。夫婦の関係としては、オヤジの会の活動をすることで、子どもたちや教育に興味関心ができて、妻とも子どもに関する会話が多くなりました。また、先生方を知る機会にもなります。学校のことについてみていない人よりは、教員の方々の大変さとか、遅くまで部活、教科、生徒指導などがあり、マスコミ等で教員批判もありますが、もっと先生方の姿を見てもらったり、話をすればもっと親も違う見方もできると思っています。オヤジの会の活動によって学校のことがわかるようになり、子どもも学校の出来事を教えてくれるようになりました」

② 教育家族と父親の関わりの問題

「私の子育てを振り返りますと子どもに精一杯の愛情を注ごうと努めてきました。しかし、人に迷惑をかけないような子どもに育てたいという思いから、躰に厳しく、すぐに怒る父親だったと思います。その積み重ねが子どもの心を傷つけていたのではないかと思います。なんで自分は子どもを規制するのだろう。周りの目を気にするばかりの教育観だったと思います。中学へ行く頃、子どもの元気がない姿を見たことが、子育ての考え方を捉えなおす起点となりました。オヤジの会と出会い交流する中で、人は生きていく上で少なからず皆迷惑をかけており、「人に迷惑をかけるな」という子育てなんてないことに気づきました。子どもの意見も聞かず、一方的に怒るのは控えよう、コミュニケーションをとってのびのびと育てることが大事だと今は思っています。自分自身オヤジの会は子育て観を変えた起点となりました。人は支えられて生きているのだと実感したわけです。地域のチカラとして今後も子どもたちに関わって、いい環境をつくっていきたいと思っています。現在はOB会員として地域を越えて父親ネットワークの活動にも取り組んでいます」

◇ K中学オヤジの会元会長 TKさんの聞き取り調査より

① 父親の子育てからの疎外

「オヤジの会で行っている飲み会など親睦の場では、自分自身の人生観ですとか、職業観、趣味のことなど様々な話題がでてきます。中学生の子どもいる父親が子育てグループ活動をすることの意義として、まず自分のためにもなっている点があります。異業種の方々との交流は、本当に楽しい。仕事へも好影響を与えているということがあります。視野の広がりという面や仕事以外の人間関係があるとある種の余裕が生まれるような気がします。家庭では見られなかった子どもの新鮮な顔を見ることも楽しいですね。あとは自分の家のことだけでなく、町内会で地域のことをしようと考えるようになったり、本当に町内会で活躍する人も多くて……。市議会議員になった人もいます。妻とは子どもが小学生の頃は、あまり学校のことを知らないので、話しませんでした。中学になってオヤジの会に入ってから、学校の先生やクラスのことにも詳しくなり、話がかみ合うので、話しやすくなりましたね。いろいろ説明を加えなくてもわかってもらえると妻も感じているようで、子どもの学校のことについて話してくれるようになりました」

② 教育家族と父親の関わりの問題

「オヤジの会に入る前と後では、多少なりとも子どもの立場を考えてものを言うようになったと思います。一方的ではなくなったのではないのでしょうか。意識は変わったと思います。オヤジの会に入って、感じたことは、子どもが中学生ぐらいになると親の考えを押し付けてもどうしようもないということ。大人として認めざるをえなくなっているのがわかってきました。オヤジの会に入り、学校によく行くようになってから、それまでは家での子どもの姿しか知りませんでしたが、学校で

はそれなりにしっかりとした様子で過ごしていることを知りました。それまでとは、違う角度で子どもを見ることができるようになりましたね。子どものことでいうならば、学校で何かチラッと心配なことがあっても担任の先生とは顔見知りになっていますからコンタクトは取りやすいですね」

＜考察＞

K 中学オヤジの会の実践と父親の学び、意識変容について語りからみてきた。その結果、グループ活動を通し、自らの子育てと仕事の関連をはじめとした子育てからの疎外状況を把握し、思春期特有の子育て課題の理解と父親としての関わり方について、学び合っていることが確認できた。中学になると幼稚園や小学校の頃のように親子の交流はもちにくい。家庭での交流が減り、わが子の様子が見えにくくなる中で、グループ活動を通じて知る、学校でのわが子の成長した様子は、父親にとって子離れのひとつのステップになっていた。また、対等な形での対話交流や真剣勝負のスポーツ交流は、子どもが思春期を迎え大人になりつつあることを親として理解する契機となっていたといえるだろう。思春期を迎えた子どもの真の姿を知ることは、教育家族の一員となり子どもをコントロールすることなどできないことを理解することにつながっていた。中学を卒業する頃は、手のかかる子育ては終わりに近づき、父親たちが地域活動に本格的に取り組むことが可能な時期といえる。オヤジの会から町内会をはじめとした地域活動への流れがつくられ、わが子だけではない、地域全体で子どもを見守るという意識形成がなされることもわかった。

6. まとめ

現代社会の父親の多くは、「仕事」に非常に高いウェートを置いた暮らしを送っている。意識の面でも子育てや家事を行いにくい社会であることは明らかであるが、子どもというつながりが生み出す新たな人間関係と親として活躍する場があれば、父親たちは予想をはるかに超える力を発揮する。父親たちはこれまでとは異なる親としての新たな関係性や価値観を獲得することによって、仕事中心の生活を変化させる。父親たちは、子育てグループを通して、わが子の子育て課題が個人的な対応だけで解決するものではなく、社会全体の課題でもあることを認識していく。卒業後、町内会や市議会議員として活躍する父親たち。グループ活動は、地域で力を発揮する基礎となっている。

思春期の課題は、家族の中だけでは解決が難しい。親は支え合う子育て協同実践の中で学び合うことによって、自らの生き方を問い返しつつようやくわが子の本当の姿が見え始め、解決の糸口が見えてくる。これは母親に限ることではなく、父親にもいえることである。そして、それは母親とは分けて父親を学習主体として位置付けることから始めなければならない。母親を親の代表として位置付けた学びでは、父親が抱える矛盾は放置されたままになってしまう危険性がある。母親と父親は、同じ親であるものとして、ひとくくりに学びを考えてしまうと、母子関係に焦点化されてし

まい、より根本的な問題が見えにくくなってしまう。母親の課題、父親の課題を整理していくことで、子育てと仕事の関係など、母親にとっても父親にとってもより本質的な子育て課題が浮上してくる。そして、母親中心の子育てグループや活動＝社会教育に父親を位置づけることが容易ではない現状の日本社会では、あえて、母親と父親を分けた形で学習組織をつくることに意義があるといえる。家族の中だけで矛盾を解決するのではなく、社会の中、支え合う協同活動を組織し学び合う集団の中で経験を積み上げていくことは、母親のみならず父親にとっても不可欠なものである。乳幼児期に限らず、思春期の子育てにおいても父親を学習主体と位置付けた子育てグループ活動を保障していくことが重要である。